

都市の「農」空間創出を考える研究「仙台まちなか農園プロジェクト」  
仙台都市総合研究機構 2006 年度研究報告書に掲載される

## まちなかに「農」の空間が必要 ～市民による地域のセーフティネットづくり～

NPO 法人幸まちづくり研究会  
代表理事 千葉美佐子

当研究会は、川崎市幸区の JR 新鶴見操車場跡地内の未利用地を暫定利用して、地域の福祉団体、NPO、行政、企業等と連携して「アグリガーデン」という、農作物も栽培できるコミュニティガーデンを運営している。この活動において、「農」が地域コミュニティにどのような役割を果たしたのかを振り返りながら、地域のセーフティネットとしての「まちなか農園」の意義を考えてみたい。

### <「農」体験は心のストレスを和らげ元気にする>

2004 年度は「大根を育ててトン汁収穫祭を」テーマにダウン症のお子さんがある家族 7 組と看板作りから大根・人参の種まき、観察会・紙芝居、収穫祭を開催。最初はどうか係わったらいいか戸惑う人もいたが、回を重ね交流することで理解が深まっていった。また、鍬の使い方や一輪車の運転がうまい子など、子どもの可能性を再発見する場となり、ともに生きることを学ぶ場となることを知った。両親からは「親も農作業を楽しめた」「昔懐かしい土の匂いがして癒やされた」「ガーデンに来るのを家族で楽しみにしている」との声があり、農作業することを通じて、ストレスを癒やし・和らげる場となっている。ストレス社会で生活する大人も子どもも、心のストレスを和らげバランスをとって健康で生きていけることが、これからのまちづくりの重要なテーマとなる。

### <「農園遊び場」は子育て支援にもなる>

核家族で子育てしているお母さんが増え「1 日夫以外の大人と話さない日もある」と聞き、2005 年度は幼児とその家族を対象に大根・人参・サトイモ・オクラ等を栽培・収穫。「子育て経験のあるスタッフやボランティアさんと話ができ、悩みを聞いてもらい気持ちがとても楽になった」「土に触れ育児のストレスも和らいだ」などお母さんの声があった。幼児にとっての「農園遊び場」は、親にとっては子育て支援の場にもなっている。

### <社会性とコミュニケーション能力をつける「農園遊び場」>

「農園遊び場」は絵本に出てくるミミズや青虫、バッタなどの生き物の宝庫である。自然の中で「五感」を使って想像力を養う幼児期に身近な地域に「農園遊び場」が必要だと感じた。今、いじめや自殺など子どもを取り巻く環境が深刻化しているが、「命」の大切さを言葉で伝えることは難しい。でも、まちなかの「農園遊び場」は、社会性やコミュニケーション能力を身につける場であり、命の大切さを学べる場となる。コンクリートやアスファルトの中で暮らし、学校農園もない幸区では「農」と触れ合える場が殆どない。生きた学びの場となる「農園遊び場」をまちなかにつくる必要がある。

### <多文化共生のまちづくりに「農」空間が必要>

2005 年度からは、DV（ドメスティックバイオレンス）を受けたフィリピン移住女性やその子どもたち

の自立を支援する団体に参加を呼びかけ、サツマイモガーデンを企画。母子家庭となった子どもが多く精神的に不安定で、言葉や文化の違いでコミュニケーションがうまくできない子どももいる。地域の人たちと交流することで心のケアにつなげていきたいと、2年目から、野宿生活者の自立を支援するNPOが昼食づくりと遊びを担当し、当研究会は土作り・維持管理・コーディネートを担い運営してきた。一緒に食事を作る、遊ぶ、収穫際を祝うなど共同で作業したことで信頼が深まり、子どもたちは明るくなった。また、協力してくれた野宿生活者だった人たちも子どもたちから元気をもらったと喜んでいる。

#### <高齢者・障害者の自立支援、社会参加の場へ>

コミュニティガーデンでは、地域の福祉団体と連携して、ディサービスの高齢者にガーデン散歩やハーブティを飲んで地域の人と交流する「おでかけ」企画を実施したところ大好評で皆さんが元気になった。

このように見てくると、“まちなか農園”が、地域コミュニティの中の弱い立場の人々が抱える様々な課題（それはとりもなおさず地域コミュニティの課題でもある）の解決に向け、いわば地域のセーフティネットとして機能しているということが言えるのではないだろうか。

昨年介護保険法が改正され、介護保険外となった高齢者の自立を支援する地域包括支援センターが新設された。介護予防サービスと言えば筋力トレーニングが先行しているが、ガーデンに散歩に来ることや農体験することも自立支援につながる。また、精神障がい者の自立支援法の施行で、地域生活支援センターが精神障がい者の自立を支援することになる。農体験や地域の人と交流できる「農」の空間がまちなかにあれば、社会参加の訓練の場となり、地域コミュニティでの雇用の場づくりにもなる。

昨年10月、仙台駅前のアーバンスコップとリトルファーム今野家の取り組みを見学させていただいた。再開発による都市化の地域課題は仙台も川崎も同様である。まちなかに「農」の空間をつくることは、お互いが支え合い健康で安心して暮らせるための「市民による地域のセーフティネットづくり」を可能とするものであると考える。